

令和 6 年 5 月 2 日現在

機関番号：14501
研究種目：基盤研究(C) (一般)
研究期間：2019～2023
課題番号：19K00474
研究課題名(和文) ポール・ヴァレリーとエクリチュールの情動性

研究課題名(英文) The expression of emotion in Valery

研究代表者

松田 浩則 (Matsuda, Hironori)

神戸大学・人文学研究科・名誉教授

研究者番号：00219445

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はコロナウィルスの蔓延の影響もあり、本来3年の研究期間が5年に延長された。この間、ロヴィラ夫人、カトリーヌ・ポッジ、ルネ・ヴォーティエに宛てられたヴァレリーの書簡や彼の作品や日記を丹念に読み直すとともに、パリのフランス国立図書館で資料の確認を行った。こうした研究の結果、これまでの研究とはかなり異なる成果を論文の形で発表することができた。とりわけポッジとの恋愛がそれよりも30年前のロヴィラ夫人との恋愛を再解釈する契機となっただけでなく、ロヴィラ夫人との愛を神話化する方向へとヴァレリーを向かわせたことを明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

どのような作家にもエロスや恋愛を表現するうえでの個別的で特殊な表現方法があるものだが、ヴァレリーの場合、単にその文面に抒情的な比喻表現が頻出するというのではなく、フランス語という言語の表現可能性の限界を問うものとなっている。いわば言語という社会システムと個人のエロスの相克の場面となる。この意味で、公表や発表を目的とされなかった内的な書き物の研究を通して、作家が言語とどのような関係を結びうるのかを考える上で学術的にも社会的にも大きな還元が期待される研究になっていると思われる。

研究成果の概要(英文)：Due to the spread of the coronavirus, the original three-year study period was extended to five years. During this period, I carefully reviewed Valery's letters to Madame de Rovira, Catherine Pozzi and Renee Vautier, his works and diaries, and checked the materials at the France National Library in Paris. As a result of these studies, I was able to present results in the form of papers that are quite different from previous Valery's studies. Among other things, I was able to show that the love affair with Pozzi not only provided an opportunity to reinterpret his love affair with Madame de Rovira 30 years earlier, but also moved Valery in the direction of mythologizing his love affair with Rovira.

研究分野：フランス文学

キーワード：エロス 手紙 ポール・ヴァレリー カトリーヌ・ポッジ ルネ・ヴォーティエ ジェノヴァの危機
ロヴィラ夫人

1. 研究開始当初の背景

1960年代以降に隆盛をみたヌーヴェル・クリティック(新批評)におけるテキスト至上主義の影響もあり、フランスでは文学作品の研究とその作家の自伝的書き物の研究とは明確に分けて考えるという「科学的な」態度が貫かれてきたが、デュラス、ロブ＝グリエ、デリダ等、そうした批評傾向を先導してきた作家たちがあいついで「自伝」を書くなど、そうした態度に見直しの動きが出てきている。とりわけ、申請者が研究対象としているポール・ヴァレリー(1871-1945)の場合、ジェラルド・ジュネットからヌーヴェル・クリティックの先駆者などとも呼ばれたが、ヴァレリーの日記『カイエ』や書簡集は、作家個人の周辺に起こった雑事を記述する場ではなく、制作をめぐる考察と追究の場であったり、さらには実作の実験場であったりするため、「私的領域」の著述の研究と「公的領域」で発表された作品群の研究とを密接に絡めないと、彼の執筆活動の全体を把握することはできない。こうした観点から、彼の作品ばかりでなく、『カイエ』や、彼が愛した女性たち(ロヴィラ夫人、カトリーヌ・ポッジ、ヴォーティエ、ロヴィトン)に宛てて書いた手紙や、彼女たちとの交流をきっかけに書かれた作品群、さらには彼女たちの著作物や日記などの分析も考慮にいれつつ、彼がいかに「知性」と「エロス」との相克の中で執筆活動をおこなったのか、そのメカニズムを明らかにした。

2. 研究の目的

ポール・ヴァレリーには、その実生活に関しても、また作家生活に関してもさまざまな神話がつきまとっている。それらの神話のかなりのものは、彼が1917年に長詩『若きパルク』を書くことによって「20年の沈黙」を破り、文学の世界に復帰して以降、作家としてパリの文壇で生き抜いていくために彼自らが生み出し広めたものと考えられる。ただ、そうしたいわば自己神話化の戦略はかなりの程度成功をおさめたとはいえ、ヴァレリー自身が、さらにはヴァレリー研究までもが、今もなお、その成功そのものの犠牲になって、肝心の作品そのものの実態が捉えられていないという面があるように思われる。たとえばヴァレリーには、1892年10月4日から5日にかけての嵐の夜、イタリアのジェノヴァで、19歳年上のロヴィラ夫人というモンペリエ在住の未亡人にたいする一方的な恋情と、「曖昧で、知的検証に耐え得ない文学」とともに放棄し、唯一信頼するに足る偶像として「知性」を選んだという神話がある。一般に「ジェノヴァの夜」と呼ばれている神話である。それによると、ヴァレリーはその「夜」の後、エロスを封印し、自らに詩作を禁じ、その代償に当時の最先端の電磁気学や熱力学や数学などに没頭し、その考察を、早朝、『カイエ』に書きつける以外、一切の作品の公表を控えたという。これは今もなお語り継がれている「知性の人ヴァレリー」の創生神話でもある。この点に関しては、ヴァレリーが1920年から28年まで交際していたカトリーヌ・ポッジとの苦しいエロス体験から作り上げた神話であることを、ヴァレリー自身の『カイエ』などにおける記述をもとに証拠立てることが重要な課題であった。

ヴァレリーは1920年6月17日、パリでカトリーヌ・ポッジに出会い、まもなく恋愛関係に入った。ポッジとの出会いが引き起こした「大波瀾」を晩年彼は次のように回想する。「ジェノヴァの夜の原因となった最初の大恋愛の咬み傷に対抗するため、私は精神的な武装を行いました。ところが、ずっと後になって(ポッジと会って)私の悲劇的人生に奇妙な大波瀾が起こりました。つまり、今度は、せっかく作った「思考」という怪物を食いつくすべく愛の方が変形し、

私の抽象的な武器を奪っただけでなく、その武器を感受性という名の恐るべき女に与えたのです……。」つまり、1920年以降、ヴァレリーは青年時代に書いた『テスト氏との一夜』のような禁欲的な知性ではなく、エロスという蛇に噛まれつつも、それに耽溺することなく戦う知性を描くことになる。こうした知性とエロスの相克がヴァレリーのエクリチュールに独特の陰影を与える。ここでいうエロスとは、「ジェノヴァの夜」以前の1880年代から90年代初頭にかけてヴァレリーが書いた詩篇に見られる象徴派的な匂いの残る「優雅で」(gracieux)、「朧な」(vapoureux) エロスではなく、512行のアレクサンドラン(1行12音綴)で構築された『若きパルク』に見られるような古典的均整美でもなく、「精神の絡まった優しさ」(la tendresse mêlée d'esprit)であり、これに由来するエクリチュールを分析することが本研究の最大の課題となる。

3. 研究の方法

本研究のもうひとつの中核をなすのは、1920年代後半から1930年代前半にかけて親密な関係にあった彫刻家ルネ・ヴォーティエ(1898-1991)に送られた書簡集の分析であるが、彼女との出会いがきっかけで書かれたヴァレリーの対話篇『固定観念』の序には次のような一節がある。「私は悶々として、手も足も出ない状態だった。いくつかの思念が異常に活発になって、神経を刺激し、他のことが一切考えられなくなってしまったからだ。(…)本来忘却されてしかるべき心的事象にとらわれて、なす術がない自分に対する苦々しい思い、屈辱感がこみあげてきた。思念に起因する苦痛は、どこまでも、もとの思念を抱懐しつづける。かくして思念は自己増殖し、持続し、強化される。」このように不幸な愛がきっかけで、本来単なる「心的事象」にすぎないものが一種の他者と化し、自らをさいなみ続ける。ヴァレリーは後年、『固定観念』では、「追いつめられることを拒もうと」格闘する自分を書こうとしたと打ち明けているが、こうした内なる「他者」との戦いの中で彼のエクリチュールはしばしば危機に陥る。『わがファウスト』執筆時にジャン・ヴォワリエ(1903-1996、本名ジャンヌ・ロヴィトン、男性名で小説を書いていた)に送られた未公開の書簡には、こうした戦いに絶望したようなヴァレリーが顔を見せる。「ああ?? 私はファウスト化する……。私はあなたの何? あなたは私の何。言ってほしい……。私をあなたにして……。あなたを私にして。」(Ah?? Je FAUSTIFIE... Je te quoi? Tu me quoi Dis moi que... Fais moi toi... Fais toi moi) ヴアレリーは、叶わぬ恋に悩むファウストと化する。Je te quoi?以下、3音綴の文が5つ連続するが、これらはいわば崩壊寸前のフランス語であり、ヴァレリーの「私」が粉碎されているのが視覚的にも見て取れる。「ファウスト化する」のフランス語 faustifie(r)はヴァレリーの造語であるが、本研究では、知性とエロスの相克の中で書きつづけるヴァレリーの限界的な言語表現さらには図像による表現(「感情曲線」やデッサン)にも着目し、その特徴を明らかにしたという点で画期的であり、ヴァレリー研究を前進させる大きな牽引力としての役割を果たすはずである。

また、このような恋愛という「心的事象」のもとで書かれたヴァレリーの作品ならびにその草稿、『カイエ』、書簡など、公的領域に属する書き物と私的領域に属する書き物との相互的な侵犯と干渉の研究は世界的に見ても類例がない。伝統的なヴァレリー研究のテーマである自我やナルシスの問題を新たな光の下で展開することを可能にするだけでなく、作家のエクリチュールの在り方を根本的に問う射程の大きな問題で、文学研究全般に大きなインパクトがあると考えられる。

4. 研究成果

〔雑誌論文〕(計4件)

松田浩則「ヴァレリーあるいは1922年春の危機 - 伝記研究とテキスト分析のはざままで」、『紀要』第48号、神戸大学文学部、2021年3月、p.23 - 60.

松田浩則「ヴァレリーあるいは「石の女」 - 『ネエールへの手紙』をめぐる一考察」、『Stella』第41号、九州大学フランス語フランス文学研究会、2022年12月、p.141 - 168.

松田浩則「ロヴィラ夫人と「パラヴァスの小さな汽車」」、『ヴァレリー研究』第11巻、日本ヴァレリー研究センター、2024年3月、p.61 - 68.

松田浩則「カトリーヌ・ボッジと「ジェノヴァの夜」」、『ヴァレリー研究』第11巻、日本ヴァレリー研究センター、2024年3月、p.69 - 95.

〔学会発表〕(計2件)

松田浩則「カリンとポールの物語あるいは《Ave atque Vale》」、『京都大学人文科学研究所』、2019年12月21日。

松田浩則「テスト氏の秘められた生活」、『日本ヴァレリー研究センター』、慶應義塾大学日吉キャンパス、2023年5月27日。

〔図書〕(計2件)

松田浩則「カリンとポールの物語 - Ave atque Vale をめぐって」(『愛のディスクール - ヴアレリー「恋愛書簡」の詩学』、森本淳生、鳥山定嗣編、水声社、2020年3月)所収、p.91 - 165.

ミシェル・ジャルティ『評伝 ポール・ヴァレリー』(恒川邦夫監修、水声社、2023年5月)、松田は第49章から52章(第3巻285 - 450ページ)の翻訳ならびに索引や注の制作を担当。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 松田浩則	4. 巻 48号
2. 論文標題 ヴァレリーあるいは1922年春の危機 - 伝記研究とテキスト分析のはざままで	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 紀要	6. 最初と最後の頁 23 - 60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松田浩則	4. 巻 41
2. 論文標題 ヴァレリーあるいは「石の女」 - 『ネエールへの手紙』をめぐる一考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Stella	6. 最初と最後の頁 141 - 168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松田浩則	4. 巻 11
2. 論文標題 ロヴィラ夫人と「パラヴァスの小さな汽車」	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 ヴァレリー研究	6. 最初と最後の頁 61 - 68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松田浩則	4. 巻 11
2. 論文標題 カトリーヌ・ボッジと「ジェノヴァの夜」	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 ヴァレリー研究	6. 最初と最後の頁 69 - 95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 松田浩則
2. 発表標題 カトリーヌと「ジェノヴァの夜」
3. 学会等名 日本ヴァレリー研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松田浩則
2. 発表標題 カリンとボールの物語あるいは《Ave at que Vale》
3. 学会等名 人文研アカデミー-2019（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 森本淳生 鳥山定嗣	4. 発行年 2019年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 284
3. 書名 愛のディスクール - ヴァレリー「恋愛書簡」の詩学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------